会員通信

「教育情報」十二号本田敏彦氏の「勝敗主義の部活から」を読みました。部活を発展させる立場からの実践は新鮮でした。高校生が、充実を覚えるのが部活であり、そこで熱心に指導する教師がいる――。それがなぜか道をはずれた批判となりやすいのですが、その出発点は正当であり、健全なものであると思います。発展させる立場で、どう育てていくのか――。そこに実践的問題の提起があります。二四～二五頁で、先生の気持ちが表されているのですが、ここを出発点として、部活の発展的な展望に結びつけて頂ければありがたいと思います。

高校バドミントン指導講習会の、その後のとりくみ、講義などがありましたらぜひ継続してご紹介いただきますようお願い致します。

「月間高校生」編集部　松田　武己

編集後記

▼大江山地域の子育て運動を中心に「地域と教育力」をテーマとして特集しました。子どもたちを核に、地域の父母と各層の人びと、学校を一丸とした子育てのとりくみは、明日の教育のあり方を展望させてくれるようで感動的です。福島教授からも論文をお寄せ頂きました。高知からは、実践報告の講演要請がきています。

▼「校長や教頭の人事異動は、閥の意向をくんだ設計図が描かれる。こっちは、筋の通らない閥人事をチェックするのがせいぜいでね。まあ、われわれは飾みたいな存在なんですよ」　（県教委幹部）

「どこの学校はどこの閥の校長、教頭とポストまで決まっているのには、まさに驚きだ。新潟県の教育がさっぱり振るわない原因は、このへんにあるのではないか」

（ある退職校長の手記）

―朝日新聞社編「いま学校で」③より―

▼「学閥」問題研究は、回を重ねるごとに、問題の所在を浮かびあがらせてくれます。さらに深層を摘出してほしいとの声が届くたびに、反響の大きさを実感しています。

▼「子どもをどうとらえるか」片岡氏の子どもへの温かい想いに満ちた連載が終りました。各地での実践例も紹介されましたが、その努力にはただ敬意を表するだけです。その他力感溢れるご寄稿に厚くお礼申しあげます。

▼子どもたちの悲しい報道が続きます。「新潟県のいじめ白書」が、当研究所から発刊されました。十分とはいえない面もあると思いますが、検討を加えた活用をぜひお願いします。

▼臨教審の先どりとして、法的根拠のないまま「初任者研修試行」が実施されようとしています。あらたな憤りを感じるばかりです。

▼本号の発行が、大幅に遅れお詫びするばかりです。第十四号は「集団と人間発達」を特集に鋭意努力していますが、他の内容も含めて期待に応えたいと思います。

（白川　実）